本部発表オンライン部会②

令和５年11月25日
三条市立大面小学校
平石　孝

社会的事象を主体的に追求し，自分とのかかわりに気付く子ども育成

１．研究主題設定の理由

今年度担任をしている学級の子どもたちは，落ち着いて学習に取り組むことができる。しかし，発言や教師の問いかけ，友達の発言への反応が少ないことが気になる。子どもが自分事として問題を解決しようという意識になっていないと感じる。これは,教師主導で教科書をそのまま教える授業をしてしまったことで，子どもが受け身になってしまい，「解決したい！」「これを調べれば分かりそう！」と意欲と視点をもった主体的な追求の場面を作れていなかったことが原因だと考える。

自分達の住む地域を学習していた３・４年生の学習と違い，５年生の社会科は日本の産業へと学びの範囲が広がる。今ある便利な暮らしは働く人々の並々ならぬ努力によって支えられているが，子どもたちにとってはそれが当たり前で意識することが難しい。当たり前の生活を支える人々の存在に気付かせなければ，子どもは本気になって考えようとせず，自分と社会的事象とのかかわりが見えてこないのではないか。

別紙アンケートの結果からも分かるように，主体的な追求が無く，自分とのかかわりが見えてこない授業をしてしまったことで，社会科が好き・得意ではないと感じている子どもが半数もいる実態となってしまった。

そこで，本実践では単元の導入で子どもの生活経験を引き出し，私たちのもつ願いを明らかにすることで，当たり前を支える人々の存在に気付かせる。そして，私たちのもつ願いに関わる学習問題(◎)を設定する。そうすることで，子どもは主体的に社会的事象を追求し，自分とのかかわりが見えてくるのではないか。

２　目指す子どもの姿

単元の導入で子どもの生活経験から私たちの願いを明らかにし，それに関わる学習問題(◎)を考えていくことで，主体的に社会的事象を追求し，働く人の工夫や努力と自分とのかかわりに気付く子どもの姿を目指す。

３　研究内容

（１）単元構成の工夫

・単元の導入で生活経験から「私たちの願い」を明らかにする。

（２）学習問題（◎）の工夫

・「私たちの願い」との関わりがある学習問題(◎)を設定する。

４　研究方法

対象者	令和４年度　三条市立大面小学校　５年松組(男子１２名，女子１６名)	
対象単元	自動車の生産にはげむ人々	くらしと産業を変える情報通信技術
期日	令和４年１０月	令和５年１月
分析方法	・授業記録　・抽出児Ａ・Ｂの記録	
A 児	教師の発問や資料提示によく反応する児童である。一方で，自分の素直な気持ちや考えを全体の場では萎縮して出せないことがある。本実践では，生活経験をもとに考えることで，自分の考えに自信をもって周りに伝える姿を期待したい。	
B 児	勉強を分かりたいという気持ちが強い子であり，素直なつぶやきも多い。一方で，学習が分からなくなると集中力が切れたり，意欲が下がってしまったりする。本実践では，生活経験をもとに考えることで,粘り強く学習に取り組む姿を期待したい。	

５　研究の実際と考察

（1）実践①「自動車の生産にはげむ人々」（１４時間）

【１】導入の工夫

「生活に欠かせない工業製品」についてアンケートを取ったところ，親・子どもともに自動車が１位であった。「なぜ，自動車が生活に欠かせないのか」を考えることから単元をスタートさせた。A児は習い事の野球に行く場面を挙げ，B児はお家の人と買い物に行く場面を挙げた。他にもお家の人の通勤の場面やスクールバスで登校する場面が挙がり，子どもたちは自動車が人や物の移動に必要で自分達の生活に欠かせないものであることを再確認した。そして「自動車が無かったら…」「自動車が故障したら…」と問うと不便や不安に思う発言が続き，「安心・安全で便利な車に乗って生活したい」という私たちの願いを明らかにすることができた。その後,1次で組み立て工場の様子,2次で関連工場として三條機械製作所を学習した。子どもたちは,1次で「機械のおかげで大量生産できていそうだけど,人も安全のために何かしているのではないか」,2次で「三條機械製作所のコンロッドのシェアが高いのは,作り方に安心・安全の秘密があるんじゃないか」と視点をもち,「安心・安全」をテーマに学習が進んでいった。

単元を通して，教室にコンロッド（エンジン内部の部品）の実物を置いた。A 男を含め，社会科や自動車に興味がある子は，休み時間に触っていた。A児は重さや固さに着目し，「頑丈さが大事だと思う」と教師に伝えにきた。見学に行った際は，実際にコンロッドが作られる様子を見ることができ，働いている人から「強度と精度が大事」ということを聞いてくることができた。

コンロッドに触れる子ども

【２】学習問題(◎)の工夫（本時 12/14）

一見すると「安心・安全で便利な車に乗って生活したい」という私たちの願いを叶えていない事象に出会わせることで,子どもの意欲を引き出すことや生活との関わりが見えてくることをねらった。子どもたちは前時に検査係の人の仕事を調べ，「不良品が 1,000 個中３～５個」ということを知っている。本時はまず，「ゆっくり丁寧にコンロッド点検していた検査係」と「7 秒に 1 本のスピードでコンロッドを作る鍛造係」を比較した。教師が「安心・安全なのかな」と問うと多くの子が分からないという反応を見せた。予想の場面でB児は 「鍛造係は強度と精度に気を付けている」と発言し，教師が「強度・精度」の中身について聞いていくと A児は「置き方に気を付けている。間違うと数が狂うから」と発言した。A児・B児ともに，見学や実際に触れた経験から考えをもった。A児の発言を受けて，何かしているはずだが中身が分からない子どもたちと「◎鍛造係の人は，安心・安全のために何をしているのか」を設定した。

Jamboard に書きこむ A 児

班での話し合いでは，Google for Education のJamboard(オンライン上のホワイトボード)を使用した。また，解決の材料としてタブレットで動画を配付して鍛造係の人が働く様子をいつでも見られるようにした。A児はずっと頑丈さが大切と考えていたことから本時も強度に着目し，それに関わる鍛造係の人の仕事を仲間と探していった。B児は，何度も動画を見返し，教師が近くへ行くと 「叩く回数」と自分の考えを伝えた。話し合いの中で，A・B児ともに自分の考えをもち，周りに伝える姿が見られた。全体共有で，A 児は前の子の強度に関わる意見に付け加えて「叩く回数も関係している」と発言し，B 子は 「ハンマーを落とす位置」と発言した。

挙手をする B 児

【実践①を終えての考察】

私たちの願いである「安心・安全」をテーマにしたことは,子どもの主体的な追求を引き出したと考える。ま

ず,A児のように休み時間に部品に触れる子どもや,三條機械製作所に見学に行った際，時間が過ぎても質問をしようとしたり，部品に触ろうとしたりする子どもの姿が見られた。これは「どうして安心・安全なのか秘密を調べたい！」という意欲を引き出すことができた姿だったと考える。また,「安心・安全」をテーマにしたことで,子どもたちは学習の見通しをもつことができたと考える。1次では「機械と人の働き」,2次では「働いている人の努力・工夫」,子どもたちは追求の視点をもった。

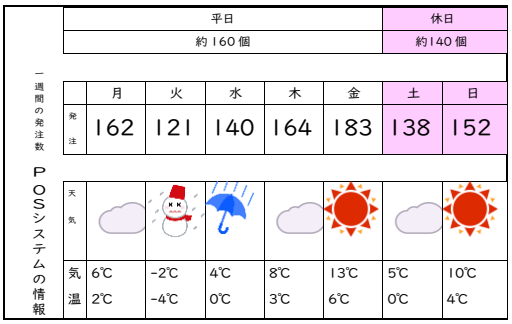
しかし本時に位置づけた学習では，「強度・精度」というキーワードに当てはまるものを動画や見学メモから一生懸命探しているだけで，自分の生活とのかかわりを考えようとする子どもはいなかった。教師としては,「事故につながる」「車が動かなくなると困る」など自分の生活とのかかわりを根拠にしてほしかった。本時では,見学で聞いてきた「強度・精度」を安心・安全につながるキーワードとしていたが，子どもが自然に使用している言葉は「頑丈」や「形」であった。子どもが使っている言葉に置き換えてあげることでイメージが膨らみ，自分の生活とのかかわりが見えてきたのではないか。また,もう一歩子どもたちの生活に近づけた学習問題(◎)を設定する必要があったのではないか。

(２)実践②「暮らしと産業を変える情報通信技術」（12 時間） １月実施 資料実践②参照

【１】単元構成の工夫

単元の導入はまず，コンビニのよさについて考えた。A・B児ともに，自身の生活経験から習い事の際によく用することを発言した。品ぞろえがいいこと，24時間営業であることなどが挙がり，私たちの生活に欠かせない場所だということを全体で確認した。生活経験から「いつでも欲しいものが買えるといいな」という私たちの願いを明らかにすることができた。品ぞろえに関連して，「売り切れがない」という意見が出てきたところで時間帯ごとのおにぎりコーナーの写真を提示した。「お昼に買う人がたくさんいる」「補充しているのを見たことがある」など意見が挙がり，いつ行っても商品があるおにぎりコーナーだが，実は商品の入れ替わりがあることが分かった。次に，教師が写真を撮った際であるが，手前が「その日」奥が「翌日」の消費期限であったことを伝え，１ 日にどれくらいの量が廃棄されているか予想させた。50～300 個と予想する子どもが多く，「おにぎりの廃棄量 1 日約 10 個」という事実を伝えるととても驚き,「◎おにぎりはいつ行ってもあるのに，なぜ廃棄が少ないのか」を次の時間に考えることになった。「買いそうな量を発注しているのではないか」や「売れた数を数えているのではないか」と予想する子どもたちに，「私たちの願いを叶えるのであれば，とにかくたくさん発注したほうがいいのではないか」と問うと，「お店が損する」「食品ロスにつながる」という考えが出てきて，「利益を上げたい」「環境をよくしたい」というお店がもっている願いについても考えることができた。買う人やお店の願いを叶える発注や POSシステムに視点を定めて追求していくことになった。

配付ミニ資料



一週間の発注数	平日					休日	
	約 160 個					約140 個	
	月	火	水	木	金	土	日
発注	162	121	140	164	183	138	152
POSシステムの情報 天気							
気温	6℃ 2℃	-2℃ -4℃	4℃ 0℃	8℃ 3℃	13℃ 6℃	5℃ 0℃	10℃ 4℃

【２】学習問題(◎)の工夫（本時７/12）

一見すると「いつでも欲しいものが買えるといいな」や「利益を上げたい」という私たちの願いを叶えていない事象に出会わせることで,子どもの意欲を引き出すことや生活との関わりが見えてくることをねらった。前時に「おにぎりの発注は簡単か，難しいか」が話題になったので，自分の考えをふり返りに書かせた。本時は，その発表から始めた。大多数の子どもは難しいと考えていたが，B児を含む簡単だと思う子どもの「売り上げ平均が分かっている」という意見を取り上げることで，大多数の子どもたちの考えを揺さぶることができた。発注をしてみたいという子どものふり返りを紹介し，売り上げ平均から発注数を予想する時間を取り，ある週の発注を提示した。A・B児含め多くの子どもが予想との違いに驚き，売り上げ平均と差がある火曜日と金曜日に特に注目していた。「願いを叶えているか」を問うと，売り切れや売れ残りが出てしまいそうと多くの子どもが自信の無い表情を浮かべた。その後，天気に着目する意見が出たところで，POS シ

ホワイトボードをもつＢ児

ステムでは天気予報も確認できることを伝えた。なぜ，発注の際に天気予報も見ているのかがはっきりしない子どもたちと「◎なぜ，おにぎりの発注をするときに，天気予報の情報も見ているのか」を設定した。

黒板と同じミニ資料を配付すると，B児は◎をすぐに書き終えて資料をじっくりと見る姿が見られた。その後の担任とのやり取りでは，自身の生活経験から「寒いと外に出たくない」「(晴れだとコンビニに)歩いて行ける」と生活経験をもとに考えを話していたので，全体の場でも指名したところ周りから認めてもらうことができた。認めてもらえたことで自信をもったのか，B児はその後も高い意欲を持続させ，その後のホワイトボードを使った班の話し合いでは，ペンをもって一生懸命友達の考えを書いていた。A児の班はおにぎりの廃棄によって誰が困るか議論をしていた。全体の場でA児は，「廃棄が増えるとゴミが増えるからゴミ焼却場の人が困る」と発言し，それを聞いた他の子が「廃棄が増えると環境に悪くなる」と続いた。４年生の学習を生かした新たな視点からも考える姿が見られた。

【実践②を終えての考察】

実践①と同様に単元の導入で生活経験を引き出し，「買い手の願い」と「売り手の願い」を明らかにしたことで，子どもたちは発注の仕方やPOSシステムについて調べたいと追求の意欲と視点をもつことができた。本時では，さらに子どもの生活に近づけた学習問題(◎)を設定するために，天気予報を取り上げた。B児は，天気によって買い物に行く時と行かない時があると話したが，これはB児が自分の生活とのかかわりから考えることができていた姿だったと考える。またB児がホワイトボードに友達の考えを書く姿が見られたが，自分とのかかわりが見えることで粘り強く学習に取り組むことができた姿だったと考える。全体共有の場面では，「天気によって売り切れになると買いたい人が買えなくて困る」や「売れ残りがあるとお店の利益にならない」と買う人・お店双方の願いに関わる意見が出てきた。加えて，A児は「廃棄が増えるとゴミ焼却場の人が困る」と4年生の社会科や総合的な学習で学んだことを生かした考えを発表してきた。A児が仲間と話し合う中で，これまでの学習とのつながりが見えて自信をもった姿だったと考える。

６　研究の成果と課題

２つの実践を通して，次の３点が成果と課題として挙げられる。

１．単元の導入で生活経験から「私たちの願い」を引き出すことで，子どもは消費者としての自分のもつ願いから意欲を高め，それを叶えている生産者・販売者の努力や工夫について視点を定めて追求することができた。

２．「私たちの願い」や自分の生活に関わる学習問題(◎)を設定し追求することで，子どもは社会的事象と自分とのかかわりが見え，粘り強く考えたり，これまでの学習を生かして考えたりすることができた。

３．子どもの生活経験を引き出そうとする際，教師主導になってしまった。子どもの言葉に置き換えてあげたり，子どもから出てくるのを待って価値づけたり，子どもが生活経験から考えることのよさを実感する働きかけが必要だと考える。

自分の考えに自信をもち，教師の発問に対するつぶやきや発言が増えてきた。今後も子どもの生活経験を大切にした単元と学習問題(◎)を考えて実践していきたい。また，付け足したり違いを話したり，教師対子どもから子ども対子どもの関わりが増えるように，聞き方や話し方指導も行っていきたい。